

曖昧性の二つの話題

後藤正紘

1. はじめに

言語の意味や構造についての研究をなお一層進めるために、どうしても解明しなければならない重要な課題はいくつかある。そして、その中の1つが曖昧性に関するものである。言語の曖昧性の問題には様々な観点から取り組むことができる。本稿において私は英語の[Noun and Noun]構造の意味解釈と派生の問題について考察したSmith(1969)と、ある種の曖昧文の意味理解と構造の解明にとって変形操作は必要不可欠かの問題について深く探究したAntal(1989)の2つの論文を分かりやすい形で紹介し、さらに、これら2つの論文でなされた主張に対する私見を述べる。

2. Smith(1969)

Smith(1969)は初期の変形文法の枠組みの中で[Noun and Noun]構造を含む文の意味解釈と派生の方法について検討したものである。

2. 1. Andを含む単文と複文

以下の(1)-(7)の文には[Noun and Noun]から成り立つ複合的な主語や目的語が含まれている。そして、それぞれの文は曖昧である。複合語は「1つの単位」(a unit)として、あるいは、「別個の実体が接続されたもの」(a conjunction of separate entities)として解釈することができる。複合的名詞句を含む文は、しばしば、単に理想的に縮約された2つの文が接続されたものであるとして分析された。しかし、and を複文(complex sentence)の中にだけ生じる1つの形態素(morpheme)であるとして扱う分析は不完全なものである。なぜなら、この分析は以下で議論する体系的曖昧性に対して形式的基礎を与えていないからである。私は「and を含む曖昧文の問題」と他の関連問題は、もし、英語の生成文法が「and を含む単文」と「and を含む複文」の両者を生成するならば解決されうると考えている。

- (1) John and Mary bought the new book by John Steinbeck.
- (2) Bricks and stones make strong walls.
- (3) George and Marmaduke have dogs.
- (4) The man and woman waited for the train.
- (5) Gerry likes ice cream and cake.
- (6) She invited Gwendolyn and Amanda.
- (7) He knows Latin and Greek.

(1) - (7)の各文の2つの読みは(8) - (14)のようになる。

- (8) a. One copy of the book was bought.
b. Two copies were bought.
- (9) a. The combination of stones and bricks makes strong walls.
b. Stone walls are strong and brick walls are strong.

- (10) a. As a unit, the two have dogs — they own a kennel.
 b. George has one or more dogs and Marmaduke has one or more dogs.
- (11) a. They waited together, perhaps for the same train.
 b. They waited separately.
- (12) a. Gerry likes the combination of goodies.
 b. Gerry likes ice cream and Gerry likes cake.
- (13) a. She invited the two girls together — they are friends, sisters, etc.
 b. She invited Gwendolyn and she invited Amanda.
- (14) a. He knows Latin and Greek — therefore can cope with classics.
 b. He knows Latin and he knows Greek.

上記の読み(a)は複合主語あるいは目的語を1つの単位と見なしたときの解釈であり読み(b)は複合語を別個の実体の接続物と見なしたときの解釈である。複合語の強勢の型はどちらの読みが採用されているかに応じて異なる。

もし、接続詞and が単文と複文のいずれの文の中においても導入されるものであるならば、前述の例の曖昧性を説明することができるであろう。すなわち、各文は2つの異なる仕方で派生されたものであるとして。私はand は英語の生成文法の「句構造のレベルで名詞句の中に」と「変形のレベルで接続物の中に」との2つの異なる仕方で生じるものであると考える。各文の読み(a)は、その文を単文と見なしたときの、そして、読み(b)はその文を複文と見なしたときの解釈である。

接続構造（すなわち、複文）のなかに随意的に生じることのできるある種の仕組みは全て、その文は、事実上、接続構造であることを示す機能を持っている。Both, (接続構造の中に生じている) each, as well as, too, などの語句や、「最初のNounの後のコンマ」、「接続構造の後の部分の（最善とは言えない）縮約」は全て曖昧ではない[*N and N*]構造を生成する。（これらの語句などは当該の要素が人工的に結び付けられていることを示すことによって、単位としての解釈を不可能にするのである。）

もちろん、接続構造の後の部分が理想的な仕方で縮約されない場合には、当該の文は接続構造としてのみ解釈しうる。

- (15) a. She invited Gwendolyn, and Amanda.
 b. She invited Gwendolyn, and Amanda too.
 c. She invited Gwendolyn and she invited Amanda.
 d. Gerry likes both ice cream and cake.
 e. John and Mary each bought the new book by Steinbeck.
 f. He knows Latin as well as Greek. (Not comparative *as*)

And で結ばれた複合的名詞句は体系的に曖昧であるので、曖昧性を解消するための仕組みとして、英語には上記のような様々な形式の「and を伴う接続構造」が存在しているように思われる。

2. 2. 単位としての読み

複合的主語や目的語を含む全ての文が曖昧であるのではない。次の(16)–(21)の文では「*N and N*」構造はすべて1つの単位としての読みのみを持つ。

- (16) The company lawyer and the union lawyer hammered out the agreement.

- (17) John and Mike paid my check.
 (18) Red and green complement each other.
 (19) Ice cream and cake are a popular combination.
 (20) Jimmie and Timmie are a pair of fools.
 (21) The child tried to mix oil and water.

もし、(16)–(21)の文が接続構造であると仮定すると、これらの文は基底文から形成されたことになる。(16)–(18)の想定される基底文は、それぞれ、(22)–(24)だが、(22)–(24)は対応する文の正しい接続物ではありえない。

- (22) The company lawyer hammered out the agreement.
 The union lawyer hammered out the agreement.
 (Conjunction should have two agreements.)
 (23) John paid my check.
 Mike paid my check.
 (Two separate acts)
 (24) Red complements green.
 Green complements red.
 (Not reflexive)

なお、(19)–(21)には接続されるべき基底文は存在しない。

- (25) *Ice cream is a popular combination.
 *Cake is a popular combination.
 (26) *Jimmie is a pair of fools.
 *Timmie is a pair of fools.
 (27) The child tried to mix oil.
 The child tried to mix water.
 (Two separate acts)

もし、複合名詞句をもつ全ての文が接続構造ならば、上記の文がどのようにして形成されるのかは明白ではなくなる。私は上記の文は接続構造ではない、したがって、英語の文法によって単文として生成されるべきだと考えている。

2.3. 接続変形

それゆえ、「1つの単位としての複数名詞句をもつ文」(sentences with unit plural *NP*'s)は文法の句構造のレベルで生成され、「別個の実体としての複数名詞句をもつ文」(sentences with separate-entity plural *NP*'s)は接続変形(conjunction transformation)によって生成されと考えられる。「Andで結ばれた接続構造」は文と文をandで結合し、かつ、両方の文に同一的に生じている要素を削除する変形を用いることによって形成される。

- (28) The secretary went to Europe
 (29) The suburbanite went to Europe (28)+(29)=(30)

(30) The secretary went to Europe and the suburbanite went to Europe.

派生の一連の段階の中で、随意変形が接続構造の後の部分の要素を削除して、(上記の例の場合には) 次の(31)–(33)のような文を生産する。

(31) The secretary went to Europe and the suburbanite went too.

(32) The secretary went to Europe and the suburbanite did too.

(33) The secretary went to Europe and so did the suburbanite.

すべての同一の要素が第二文から削除されたら、最終段階の仕事は「異なる要素と結合形態素を移動させて複合的名詞句、あるいは、複合的動詞句を形成し、次に、この移動に伴う動詞の接辞を単数から複数へと変える」ということである。

(34) The secretary went to Europe and the suburbanite →

(35) The secretary and the suburbanite went to Europe.

(両方の文に同一的に生じている要素は、動詞の接辞を除けば、上で略述された規則の影響を受けないことに注目しなさい。)

さて、(28)と(29)と同様な次の対をなす文について考察すると、これらの文は主語に関してのみ異なっていることが分かる。唯一の構造上の相違は、これらの文は目的語の中に限定詞 a を含んでいるが、(28)と(29)では主語の中に限定詞 the を含んでいるということである。しかし、(28)と(29)の場合に略述した手順に従って、これらの文が結合されると、結果として「間違った文」(wrong sentence)が生じてしまう。

(36) John is a philosopher.

(37) Mike is a philosopher.

(38) Gwendolyn wants a cat.

(39) Amanda wants a cat.

Conjunction:

John is a philosopher
Mike is a philosopher → (40) *John and Mike are a philosopher.

Gwendolyn wants a cat
Amanda wants a cat → (41) Gwendolyn and Amanda want a cat.

(40)の文は非文法的である。(41)は単位の目的語を持っている。しかし、(41)が接続構造として解釈されるためには、別個の実体としての目的語が必要とされる。さらなる操作が施されると(40)と(41)は接続構造として解釈可能な文に変わる。すなわち、目的語に関わっている「限定詞と接辞」が複数に変えられなければならない。

前述の(36)と(37)の文の接続と(38)と(39)の文の接続の場合には、動詞だけが複数へと変えられただけであった。

- (42) John and Mike are philosophers.
 (43) Gwendolyn and Amanda want cats.

(44)と(45)の対をなす文を結合するためには接続変形が必要である。

- (44) George pays his (own) check.
 (45) Erwin pays his (own) check.

(44)と(45)は、これまで考察してきた他の対をなす文の場合と同様に、主語を除けば同一である。これらの文の目的語はtheやaではなく同一の属格限定詞を持っている。「単純な接続の手順」(simple conjunction procedure)がこれらの文に適用されると、間違っただけの結果が生じる。

- (46) *George and Erwin pay his check.

目的語が複数に変えられると、その結果として(44)と(45)の正しい接続形式である(47)が生み出される。

- (47) George and Erwin pay their checks.

「Andを用いての接続の規則」はある種の文の場合には動詞と目的語を複数に変えなければならない。そして、「結合された文が同一の動詞や目的語（あるいは、叙述名詞(predicate noun))を持つとき」や「目的語、あるいは、叙述名詞が限定詞 a、あるいは、同一の属格限定詞を持つとき」あるいは「接続構造の後半の部分が部分的に縮約されているとき」には、さらなる段階が必要とされる。私は、これらの規則が付加されれば、ここでは略述しただけの一般的な接続規則は別個の実体の接続構造として解釈可能である文を首尾よく生成することができると考えている。これらの規則の付加は複合名詞句が文法の句構造規則で生成されるときにのみ可能である。他の場合には、前述した間違っただけの接続構造のような文の根源となるものが存在しないからである。

- (46) George and Erwin pay his checks. (*His* not identical)
 (41) Gwendolyn and Amanda want a cat.

すなわち、(46)や(41)のような文は複合的主語を持った単文として生成されるのである。(38)と(39)を目的語を変化させずに接続させると(41)のような非文法的な文になってしまう。「叙述文は常に複数主語の場合には複数述語を持たなければならない。」(Predicate sentences must always have plural predicates with plural subjects.)

3. Antal(1989)

Antal(1989)は「変形モデル(transformational model)は句構造モデル(phrase structure model)では説明できない曖昧文の意味と構造を適切に説明できるので、句構造モデルより優れている」あるいは「曖昧文を説明するためには変形は必要不可欠である」という従来の定説は誤りであることを3種類の曖昧表現を考察の対象として証明しようとした論文である。

3. 1. 前置詞句の働き

- (1) They decorated the girl with the flowers.
 (2)a. (彼らは少女を花で飾った。)
 b. (彼らは花を持った少女を(何かで)飾った。)
 (3)a. (They)_{NP} ((decorated)_V (the girl)_{NP} (with the flowers)_{PP})_{VP}
 b. (They)_{NP} ((decorated)_V ((the)_{Det} (girl)_N (with the flowers)_{PP})_{NP})_{VP}

(1)の文には(2a)と(2b)の2つの意味解釈がある。そして、(2a)の読みは(3a)のように、また(2b)の読みは(3b)のように構造分析される。それゆえ、一般的には(1)は曖昧文であり、(1)が持つ2つの読みは(3a,b)のように表面構造における構造の相違に反映されていると考えられている。そして、従来、(1)の文と同様な表面構造、すなわち、(4)の表面構造を持つ文は全て曖昧であると(深い考察もなく安易に)考えられてきた。

(4) NP + VP + NP + PP

しかし、(4)の構造を持つ多くの実例を詳細に検討してみると「NP + VP +NP +PPの表面構造を持つ記号列は曖昧である」という主張にはたくさんの不備や誤りがあることがわかる。Chomsky(1970)はChomsky(1962)で提案した基底部規則(base rule)の生成能力を(5)–(7)のようにかなり拡大した。

- (5) NP → N Comp
 VP → V Comp
 Comp → NP, S, NP S, NP Prep-P, Prep-P Prep-P, etc.
 (6) VP → V Comp
 Comp → NP PP
 (7) VP → Comp
 Comp → NP
 NP → Det N PP

(5)の基底部規則を用いると、(3a)の句構造は(6)の、そして、(3b)の句構造は(7)の基底部諸規則を適用すると生成することができる。(それゆえ、Chomsky(1962)では必要であった変形はChomsky(1970)では不必要になっている。)

- (8) They bestowed the girl with the flowers.
 (彼らは少女に花を与えた。)
 (9) They heaped the girl with the flowers.
 (10) They decorated the girl with reluctance.
 (11) They decorated the girl with pleasure.
 (12) They fired the girl with the flowers.
 (彼らは花を持った少女をくびにした。)
 (13) They arrested the girl with the flowers.
 (14) They got tired of the girl with the flowers.
 (15) They decorated the girl with the green eyes.

(8)–(11) の文は(6)の基底部規則によってのみ生成され(2a)と同様な読みを持ち、一方、(12)–(15)の文は(7)の基底部規則によってのみ生成され、(2b)と同様な読みを持つ。したがって、(8)–(15)の文は、いずれも曖昧ではない。

3. 2. さらに複雑な実例

- (16) They decorated the girl with the children.
 (17) a. (彼らは少女と子供たちの両方を飾った。)
 b. (子供たちと一緒にあって、彼らは少女を飾った。)
 (18) They decorated the girl and the children.
 (19) With the children's participation, they decorated the girl.
 (1) They decorated the girl with the flowers.

(16)の文には(18)のようにパラフレーズされる(17a)の読みと、(19)のように言い換えられる(17b)の読みがあるので(16)は曖昧である。これら2つの読みは本来の記号列 (original string) である(1)の文の2つの読みとはタイプにおいて異なるものである。

また、意味関係は、しばしば、不明瞭になりがちである。

- (20) They mentioned the girl with the flowers.
 (21) a. (彼らは花を持った少女について言及した。)
 b. (彼らは少女と花の両方について言及した。)
 (22) The girl, who has flowers (or is in some way connected with flowers), was mentioned by them.
 (23) They mentioned the girl and the flowers.
 (24) They kissed the girl with the flowers.
 (25) a. (彼らは花を持った少女にキスした。)
 b. (彼らは少女と花の両方にキスした。)
 (26) The girl who had the flowers was kissed by them.
 (27) The girl and the flowers were kissed by them.

(20)には(22)のようにパラフレーズされる(21a)の読みは疑いもなくある。しかし、(23)のように言い換えられる(21b)の読みは無いように思われる。また、(24)には(26)のようにパラフレーズされる(25a)の読みがあることは明白であるが、(27)のように言い換えられる(25b)の読みがあるとはどうしても言い難い。

動詞killの場合には、さらに興味深い読みが生じる。

- (28) They killed the girl with the bullets.
 (29) a. (彼らは弾丸で少女を殺した。)
 b. (彼らは弾丸を持った少女を殺した。)
 (30) They used bullets to kill the girl.
 (31) They killed the girl who had bullets.
 (32) They killed the girl with the fneckles.
 (33) (彼らはそばかすのある少女を殺した。)

- (34) They killed the girl who has freckles.
 (35) They killed the girl with the soldiers.
 (36) a. (彼らは少女と兵士たちの両方を殺した。)
 b. (彼らは兵士たちの協力を得て、その少女を殺した。)
 (37) They killed the girl and the soldiers.
 (38) With the soldiers' participation , they killed the girl.
 (39) They killed the girl with the knife.
 (40) (彼らはナイフで少女を殺した。)

(28)には(30)のように言い換えられる(29a)の読みはあるが、(31)のように言い換えられる(29b)の読みはありそうにない。(32)には(34)のようにパラフレーズされる(33)の読み以外には妥当な読みはないであろう。(35)には(37)のように言い換えられる(36a)と(38)のように言い換えられる(36b)の2つの読みがある。(39)の読みは(40)だけである。なぜなら、「少女とナイフの両方を殺す」ことなど不可能だからである。

前述した実例から可能な意味解釈は、それぞれの記号列の中に偶然的に共起した語彙要素の間の恣意的な相性の良し悪しによって決定されていることが分かる。さらに、Block(1986)が述べているように「文の意味解釈に関する多くの現象は、本質的には統語的な性質のものではないので、文の意味解釈を統語的考察によって説明することはできない」と考えられる。

3. 3. 動名詞か分詞か

- (41) Flying planes can be dangerous.
 (42) a.(飛行機を操縦することは危険でありうる。)
 b.(飛んでいる飛行機は危険でありうる。)

(41)の文には(42a,b)の2つの読みがある。(41)の文は統語的曖昧文の古典的な例であり、この文の曖昧性を解消し、かつ、この文の特性を説明するためには、2つの異なる深層構造に言及せざるをえない例であるとして、度々、引用されてきた例である。しかし、実は(41)の文の曖昧性を解消するためには、変形に依存する必要などなく、伝統的な分布方式(traditional distributional method)を用いることによって比較的簡単に解消することができると考えられる。

- (43) Flying planes is dangerous.
 (44) Flying planes are dangerous.

(41)は意図的に複数名詞 planes と助動詞 can を用いて提示されているのであり、(41)から助動詞の can を除いて単純な平叙文にすると、(41)は(43)と(44)の2つの異なる構造であることがすぐに判明する。(43)の中のFlying planes をFlying planes₁とし、(44)の中のFlying planes をFlying planes₂と表すと、Flying planes₁では名詞planesはその主要語(head)であるFlyingに従属しており、一方、Flying planes₂ではFlyingはplanesに従属していると言うことができる。

Flying planes₁とFlying planes₂の相違は本来的記号列に1つの重要な操作を施すと、ますます明確になる。

- (45) Flying a plane can be dangerous.

(46) A flying plane can be dangerous.

(45)と(46)の文の存在から判断すると、(41)は1つの曖昧文ではなく、曖昧ではない(45)と(46)の2つの異なる文の表面構造が、たまたま、同一になっている形式であると考えられる。本来的記号列(41)に様々な操作を施した結果として生じる文を次に列挙する。

(40) FLYING PLANES CAN BE DANGEROUS.

- (47) a. Flying planes is dangerous.
 b. Flying a plane can be dangerous.
 c. Flying a plane is dangerous.
 d. To fly a plane is dangerous.
 e. Flying planes are dangerous.
 f. A flying plane can be dangerous.
 g. A flying plane is dangerous.

次に(41)と表面上類似した文である(48)と(50)の2つの文に(41)の場合と同様な操作を施した文を列挙する。

(48) STEALING BOOKS CAN BE DANGEROUS.

- (49) a. Stealing books is dangerous.
 b. Stealing a book can be dangerous.
 c. Stealing a book is dangerous.
 d. To steal a book is dangerous.
 e. *Stealing books are dangerous.
 f. *A stealing book can be dangerous.
 g. *A stealing book is dangerous.

(50) SLEEPING LIONS CAN BE DANGEROUS.

- (51) a. *Sleeping lions is dangerous.
 b. *Sleeping a lion can be dangerous.
 c. *Sleeping a lion is dangerous.
 d. *To sleep a lion is dangerous.
 e. Sleeping lions are dangerous.
 f. A sleeping lion can be dangerous.
 g. A sleeping lion is dangerous.

(48)の文の場合にはFlying planes₁ のタイプの意味解釈を持つ文のみが容認可能であり、一方、(50)の文の場合にはFlying planes₂ のタイプの読みを持つ文だけが容認可能である。なお、Flying planes₁ とFlying planes₂ の句構造の相違は伝統文法における動詞 fly の動名詞と分詞の相違に基づいている。これら2種類の構造は2つの文法の片(grammatical pattern)あるいは文法的類推(grammatical analogy)と呼ばれるもの、すなわち、(52)と(53)である。

(52) Analogy 1: *Ving_{ger.}* + N

(53) Analogy 2: *Ving_{part.}* + N

そして、他動詞だけがAnalogy 1 とAnalogy 2 の両方に生じることができる。なお、「ある記号列が2つの仕方で解釈されるか否かは動詞のみならず、その記号列の中に生じる名詞にも依存している」と主張してもよいであろう。

(54) Exciting books

(55) (感動的な本)

(56) Exciting women

(57) a.(刺激的な女性) b.(女性をわくわくさせること)

(54)にはAnalogy 2 の解釈があるだけだが、(56)にはAnalogy 1 とAnalogy 2の2つの読みが可能であるという事実が上の主張の正しさの証明となる。

3. 4. 動詞と名詞の連語可能性

(58) the shooting of the hunters

(59) a.(狩人が(何かを)撃つこと)

b.((誰かが)狩人を撃つこと)

(60) the growling of the lions

(61) the raising of flowers

(58)の句は曖昧であり(59a,b)の2つの読みがある。また、(60)には(59a)と同様の読みだけがあり、一方、(61)には(59b)と同様の読みだけがある。通常、動詞 shoot と raise に内在する意味特性の相違が(58)の句は曖昧だが(61)の句は曖昧ではないという事実を説明する。しかし、この説明では不十分である。

(58) the shooting of the hunters

(62) the shooting of the cans

(63) the shooting of the cannons

(64) the writing of the hunters

(65) the shooting oh the infants

なぜなら、(58)と(63)は曖昧だが(62)、(64)と(65)の句は曖昧ではなく、それぞれ、「(誰かが)カンを撃つこと」、「狩人たちが(何かについて)書くこと」、「(誰かが)幼児たちを撃つこと」の1つの読みを持つだけであるからである。最終的な説明は、この場合にもまた、それぞれの句の中に共起している動詞と名詞の連語可能性に依存することになるように思われる。

4. おわりに

Smith(1969)は明快な論文である。Smith(1969)は「*Noun and Noun*」構造を含む文の意味解釈と派生の方法について考察したものである。

(i) Bricks and stones make strong walls.

(ii) a. (れんが造りの壁はじょうぶで、石造りの壁もじょうぶだ。)

b. (れんがと石を混ぜた素材で壁を造ればじょうぶになる。)

(iii) Gerry likes both ice cream and cake.

(iv) (ジェリーはアイスクリームとケーキの両方が好きだ。)

(v) The company lawyer and the union lawyer hammered out the agreement.

(vi) (会社側の弁護士と組合側の弁護士は一致にこぎつけた。)

例えば, (i),(iii),(v)の文は, いずれも[Noun and Noun]構造を含むが, (i)のみが曖昧であり(iii)と(v)は曖昧ではない。(iii)の中の当該構造は接続構造であり, (v)の中の当該構造は単位構造である。多くの変形文法家たちは, (当時), 等位構造はすべて基底では別個の文であるものをand を用いて接続したものである, つまり, 変形操作を用いることによってのみ派生されると考えていた。しかし, Smith(1969)は, この考え方では(i)の文の曖昧性や(v)の文が単位構造であることを説明できないことに着目し, [Noun and Noun]構造には変形によって派生されるものと, (変形なしで)句構造規則のみによって派生されるものとの2種類があると主張した。

Antal(1989)は実に興味深い論文である。

(vii) They decorated the girl with the flowers.

(viii) Flying planes can be dangerous.

(ix) The shooting of the hunters is terrible.

変形文法は, 主として, 言語の曖昧性を説明するために「表面構造と深層構造」, 「句構造規則と変形規則」などの概念を案出し導入した。(vii)-(ix)は, いずれも曖昧文の例としてよく用いられるものである。そして, (vii)と(viii)は表面構造のレベルでも説明できる曖昧文であるが, (ix)の曖昧性を説明するためには, 深層構造のレベルは必要不可欠であるとされてきた。しかし, Antal(1989)は(vii)-(ix)は, いずれも曖昧な1つの文なのではなく, 曖昧ではない2つの文であることを多くの例を提示することによって力説している。また, 彼は(vii)-(ix)と表面の形式は同一でも曖昧ではない文の実例を提示して, (vii)-(ix)の文が曖昧なのは「表面の形式と用いられている動詞の特性」によるものではなく「表面の形式と用いられている動詞と名詞の連語可能性」によるものであり, したがって(vii)-(ix)が曖昧なのは必然ではなく偶然の結果であると主張している。さらに, 彼は話し手が発話する際に依拠しているものは「創造性(creativity)よりも類推(analogy),すなわち, 記憶(memory)である」と述べて言語運用(performance)の側面の研究が, 人間の言語使用の諸問題を解明するためには重要であることを示唆している。

私も定説に異を唱えているAntal(1989)を熟読して, 彼の主張に同意せざるをえないと思った。(すなわち, 変形文法家は変形の必要性を強調したいあまり, 句構造を軽視し, 変形規則を, 殊更, 重要視し, しかも意図的に偏った実例の選択と提示をしていることが判明したので。)そして, 理論はかなり恣意的なものであるので, 私の今後の研究は理論の構築よりも言語事実の発掘を主眼とするべきであることを今更のように痛感した。

参考文献

- Antal, Laslo (1989) "The Role of Transformations in the Analysis of Syntactic Ambiguity," *Word* Volume 40, Number 3, 349-367.
- Block, Russel L. (1986) *Revolution and Revision in der Generativen Theoriebildung*. Guenter Narr. Tuebingen.
- Chomsky, Noam (1962) *Syntactic Structures*: Mouton, The Hague.
- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*: ed. by Jacobs, R. and Rosenbaum, P., 184-221, Ginn, Waltham, Mass.
- Smith, Carlota S. (1969) "Ambiguous Sentence with And," *Modern Studies in English*: ed. By David A. Reibel and Sanford A. Schane, 75-79, Prentice-Hall, Inc.,

Englewood Cliffs, New Jersey.